

記録日付：2014年7月24日

史訪会WEBニュースレター6

編集人：新地比呂志

E-mail: CQB02347@nifty.com

暑い夏ですが、会員の皆様にはご清栄のことと存じます。史訪会学術討論会も8月3日に迫ってきております。研究プロセス及び成果を交流し、相互研鑽及び親睦をはかっていきましょう。

追伸：史訪会メンバーによる、『中国における政治・経済・社会の進展と実相』（晃洋書房）を2015年2月に出版予定にしています。執筆者には、ご無理申し上げることもあるかと思いますがよろしくお願い申し上げます。

2014年 史訪会学術討論会

- 1 日時 平成26（2014）年8月3日（日） 10時～18時
- 2 場所 兵庫県民会館 会議室304
神戸市中央区下山手通4-16-3
078-321-2131
<http://hyogo-arts.or.jp/arts/kenminmap.htm>

☆18:30より広東料理「悠苑」にて懇親会を予定しております。会費5000円。
討論会の出欠とあわせてお知らせ下さい。

投稿目次

- | | |
|------------------------|-----|
| 1. グローバル社会を生きる大学の人材育成 | 黄麗雲 |
| 2. 民国時期海南島の師範教育について（Ⅲ） | 趙従勝 |

グローバル社会を生きる大学の人材育成

新生医護管理専科学校

助理教授 黄麗雲

さる2014年6月13日（金）、開南大学設置14周年、創立97周年記念事業として日本姉妹校を招き、「グローバル社会を生きる大学の人材育成」をテーマにした「21大学学長会議」を開催した。開南大学の学長の高安邦先生は日本語でご挨拶をした。ゲストとして民進党大老辜寬敏も日本語で祝辞を述べた。その他、日本交流協会、台日文化経済協会、台湾日本人会の代表もお祝いの言葉を述べた。私は見学のつもりでその開会式に参加した。日本の大学の基調講演は興味深く、大変参考になった。

基調講演の内容下記の通りである。

- ① 森田 潔（国立岡山大学学長） 「学都・岡山に根ざした創造的グローバル大学を目指して」
- ② 山里 勝己（公立名桜大学学長） 「名桜大学のリベラルアーツ教育について」
- ③ 古賀 実（公立熊本県立大学学長） 「熊本県立大学における地域密着型グローバル人材育成プログラム～地域から世界へ～」
- ④ 伊藤 忠通（公立奈良県立大学学長） 「グローバル人材の育成と大学改革」
- ⑤ 安田 孝志（愛知工科大学学長） 「グローバル社会を（製造業技術者として）生き抜く人材の育成」
- ⑥ 亀山 郁夫（名古屋外国語大学学長） 「グローバル人材の要請と次世代の教養教育」
- ⑦ Mark WILLIAMS（公立国際教養大学理事兼副学長） 「21世紀の日本における『グローバル人材』育成への取り組み」
- ⑧ 額 厚（国立山口大学理事兼副学長） 「国際化に向けた人材育成」
- ⑨ 佐々木 宏（了徳寺大学副学長） 「人生を映かせる了徳寺大学」
- ⑩ 伊丹 利明（国立宮崎大学副学長） 「宮崎大学発！！グローバルデザイナー」
- ⑪ 佐藤 利行（国立広島大学副学長） 「グローバル人材育成のための取組」
- ⑫ 伊藤 博明（国立埼玉大学副学長） 「国立大学改革プランのもとでのグローバル人材育成」
- ⑬ 窪田 高明（神田外語大学副学長） 「外国語学部とグローバル人材育成」
- ⑭ 久恒 恒一（多摩大学教授兼経営情報学部部長） 「日本型グローバル人材—3つの新条件」

- ⑮ 立松 昇一（百年兄弟校拓殖大学教授）「拓殖大学におけるグローバル人材の育成について」
- ⑯ 小林 康男（星城大学教授兼国際センター長）「星城大学の人材育成—自分づくり—」
- ⑰ 古木 圭子（京都学園大学教授兼国際交流センター長）「京都学園大学におけるグローバル社会を生きる人材の育成」
- ⑱ 廣本 和枝（松蔭大学教授兼留学生センター委員）「日本人の『内』と『外』」
- ⑲ 堀江 正之（日本大学教授兼学務委員会長）「日本大学商学部における海外学術・教育連携の模索」
- ⑳ 楢林 建司（国立愛媛大学教授）「文系学生のためのグローバル人材養成～愛媛大学における試みの紹介～」

上記、基調講演は、グローバル人材育成に関する方案・対策の企画・実施に関するものであった。最後に人材育成のあり方を紹介したい。

文部科学省が進めるグローバル人材推進事業に関して、下記3要素を挙げている。

- ①語学力②積極性、協調性、使命感③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

これ受け、大学においては、奈良県立大学・名古屋外国語大学・国際教養大学・山口大学が先進的な取り組みを展開している。奈良県立大学は「地域再生の核となる大学づくり構想」を打ち出している。つまり、ローカルな視点とグローバルな視点を併せ持つ「グローバル人材」の育成を目標としているのである。また、愛知工科大学は企業とともに成長を続ける「総合力のある現場即応・イノベーション人材」の育成を目標としている。名古屋外国語大学においては「グローバル人材」と「イノベーター人材」の2つを着実に育成するために、世界標準としての「教養知」の構築に取り組んでいる。国際教養大学においては、英国の教育システムにも参照し、研究を指向するための教育に取り組んでいる。その戦略として、セメスター制や成績アセスメントのGPA制などを構想しているという。山口大学では、新学部「国際総合科学部」の創立を構想している。この「国際総合科学部」においては、1年間の海外留学を義務化し、そこで培う国際感覚とタフなリスク・マネジメント力がある人材を育成することを目標とする。つまり「グローバル・サイエンス・コーディネーター」とを育成するのである。

グローバル社会を生きるための人材育成のシステム構築は急務であり、そのための研究を推進していかなければならないことを痛感した。

民国時期海南島の師範教育について（Ⅲ）

趙 從勝

民国時期海南島師範教育の内容（二）

前回、民国時期の海南島師範教育の内容（一）、すなわち、1. 師範学校の設立と目的、2. 管理機構と教育目標の変遷、3. 訓育管理を紹介した。今回は、引き続きその残りの内容を述べていきたい。

4. 教材、課程（カリキュラム）・単位

民国時期の中学・師範学校の教材は国定本・省定本・自編本の3種に分かれていた。民国初期においては、海南島の各師範学校は、基本的には教育部審査の教科書を採用していた。省立第六師範学校（以下六師）は、修身・国文・算術等の教材を使用したほか、教員は自ら国文（国文読本・文字学・文法学・文学史各種）、手工講義等を編集していた。民国35年（1946）教育部の規定により海南島各師範学校は国定本を改めて使用し、地理的条件の不便により教材の供給は間に合わず、教学の展開が遅れることとなった。

民国初期、教育部は、「師範学校は16科目、即ち修身・読経・教育・国文・習字・外国語・歴史・地理・数学・博物・物理化学・法制経済・図画・手工・農業・商業あるいは楽歌あるいは体操等の課程を開設しなければならない」と規定した。この規定は、いまだ清末師範教育の影響がのこっていた。しかし、1919年以降、読経を廃止し、国文を国語、修身を公民に改め、教育学と体育を重視するようになった。

1922年、教育部の新学制が公布され、広東の省立師範学校は、広東省署が制定した六年制の前・後期師範課程により新学制を執行した。前期3年は「通習」（必修科目）を履修し、後期3年は科目を選択し履修するようになっていた。おおよそ、国文・史記・外国語・数理化・博物・芸体の5種類に分けられていた。

海南島各師範学校は教育部の規定を完全に遵守し、学校の課程設置を必修科と選修（選択履修）科に分け、必修科目は、国語・外国語・人生哲学・社会問題・世界文化史・科学概論・体育・音楽・心理入門・教育心理・普通教学法・小学各科教材研究教育測驗（テスト）・統計小学行政・教育原理があり、選修科目は、3種類に分けられた。すなわち、「①国文および社会科を重視する、②数学幾何自然科学を重視する、③芸術と体育を重視する」ことであった。その履修に対する規定もあった。

1935年、教育部は「修正師範学校規程」を公布した。簡易師範学校において、公民・体育・国文・算学・地理・歴史・植物・動物・化学・物理・劳作・美術・音楽・農業及実習・水利概要・農村経済及合作・教育概論・教育心理・小学教材及教育法・教育測驗及統計・郷村教育・小学行政及実習等の課程を必ず開設することを規定した。師範学校においては、「公民・体育・衛生・国文・算術・地理・歴史・生理・化学・物理・倫理学・劳作・美術・音楽・教育概論・教育心理・小学教材及教育法・小学行政及実習・教育測驗及統計・実習等課程」を必ず開設することを規定した。

六師においては、高中（高校）師範と郷村師範によって課程の設置も異なっていた。高中師範の課程は必修課（程）と選修課（程）の2種に分かれ、必修課程の授業時間は155コマ、127単位のほか、党議12単位・軍事訓練6単位・選修課程17単位を加え、計162単位を修得しない限り卒業できないと規定され

た。また、その中の課程を実際の状況により調整できるようになっていた。例えば、高中師範の女子生徒は軍事訓練を履修せず、看護あるいは家事学を代わりに習得する。さらに、選修課程を体育組・芸術組・語文(国語)組・実用技能組等に分類し、生徒が自主的に選択できるようになっていた。選修課程の学生は20人未満になると課程は成立せず、制度的に柔軟性をもっていた。

郷村師範の課程はすべて必修科目となっており、195 単位を修得しなければならず、学期毎に平均習得単位は 32.5 であった。また、資料によると、もっとも多く単位数を占めるのは、教育概論・児童学・郷師教育・教育実習を含む教育関係の科目であった。その目的は学生の基本教育理論を培い、一人前の小学教員を育成するための教育課程であった。

民国時期の師範教育は主に高中師範と郷村師範(簡易師範)である。この時期の師範教育を研究するには、比較的資料保存のよい広東省第六師範学校から着手するしかない。海南島の師範学校の学制は一般的には 3 年制であり、上下両学期に分かれ、単位制を厳格に執行されていたことが分かる。「壬辰学制」を実施以後、英文・算学・物理・化学等科目の授業時間を増加し、必修科目と選修科目に分け、課程の配置は段々と完全化していった。

高中師範と郷村師範は単位制を実施し、毎週各科目の授業は 1 コマ、予習・復習 1 コマを経て、一学期の単位は 1 とした。ある予習・復習の少ない科目、例えば図画・手工・体育等は、毎週授業 1 コマであるが、1 学期の単位は 0.5 となっていた。高中師範は 3 年間で 192 単位を修得し、郷村師範はそれより 33 単位少なかった。毎学期、規定の単位を修得できたものは次の学年に進級することができた。修得した単位は、規定単位の 3 分の 1 に達していなかった場合、留年となり、3 年間の修得単位は総単位の 3 分の 1 を超えていないものは卒業できなかった。

5. 教学方法と教育実習

高中師範と郷村師範(簡易師範)の類型は異なるため、学生のレベルもある程度の差があり、採られた教学方法と置かれた重心も異なる。高中師範は独学補佐、問題討論、実験研究を重点に、教室での教学は重要な内容だけを講義し、学生への啓発に重んじている。郷村師範は講義に重点を置き、独学補佐、問題討論、実験研究をできる限り実施し、高いレベルの教育内容を要求しなかった。全校の学生は、授業と自習以外に毎週 1 回の学術講演を行なわなければならなかった。師範学生については実習を最も重視されていた。高中師範については第 2、3 学年から、郷村師範は第 3 学年から、実習が開設されていた。実習の手順は、参観、見習い、試教(授業の実習)である。参観の学校は本島あるいは広東大陸の学校であった。費用は学校の固定田産(学田)の租税から支出していた。見習い、試教は附近の小学校あるいは本校の高(等)小(学)班(六師の場合)であった。実習成績は指導の先生によって評価され、授業指導案は 30%、授業 50%、参観 20%を占め、3 項目の合計が実習成績となっていた。

今回は「6. 試験、処罰」、「7. 学生」を紹介し、民国時期海南島師範教育の内容をまとめる予定である。